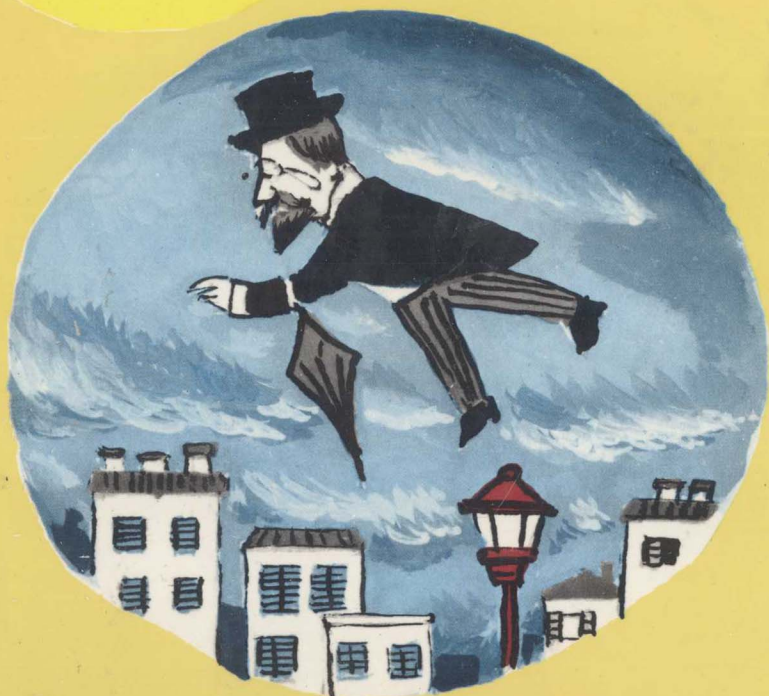
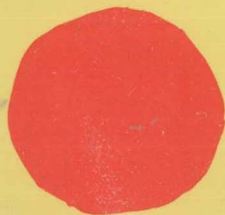


# 怪盜 ジバコ

北 杜 夫



文藝春秋



怪盜  
ジバコ

北 杜夫



怪盗ジバコ

定価四五〇円

昭和四十二年三月二十日第一刷

昭和四十九年一月三十日第四十八刷

著者 北 杜 夫

発行者 櫻 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

電話東京二六五局一二一一

印刷 凸版印刷

製本 矢嶋製本

万一乱丁落丁がありましたらおとりかえします

© 1967 MORIO KITA PRINTED IN JAPAN

0093-300401-7384

怪盜ジバコ

もくじ

怪盗ジバコ 5

クイーン牢獄 33

猿のバイブ 59

女王のおしゃぶり 95

蚤男  
127

トプカピ宮殿  
157

007号出撃す  
193

ジバコの恋  
231

装幀 谷内六郎



怪盜ジバコ



怪盗ジバコの名前に関しては、百を越える異説があるので、それをここに一々詳説することはできない。

本名はもとよりわからない。その出生は秘密の帳につつまれている。一体もとは何国人であったのか、どのような肌のいろをし、どのような目のいろをしているかも判明していない。彼は変相の名手だったからである。

ともあれ、彼はサン・アルナウ伯と称していたこともある。アラ・ウド・デイン・キエルジの名を使っていたこともある。カルロ・フアネリ、ジョン・リン、ヤマシタ・ケンタロウ、ジェームス・エイローなどという聞いたことのあるような名とか平凡な名、或いはアジャ・ブジバ・タルタローなどという妙な名前を持っていたこともあった。

そのほか百の名に、渾名、通称がゴマンとある。

わが国でも、各種の名で呼ばれているが、ここ十年来——いま、この文が書かれているのは一

九××年だが——もっぱら怪盗ジバコと呼ばれている。

それがどこから由来したかにも各説があるが、その一つによるところである。

当時、わが日本にある方面のたいそうな権威である学者がいた。どのくらいかの権威かというところ、その方面の事柄については余人は一語も口をだすことができず、あまつさえ当の学者までひとことも口をきかないというほどの大学者であった。

彼は大学者であるから、むろんのこと奇人であり、変人であった。その一つは彼がケチなことである。大学者である彼のもとには、さまざまな文書が到来するが、毎日一通は、どこかの雑誌からのアンケートが来、また三通はなにかのパーティの通知がくる。アンケートは往復ハガキのことも多い。すると大学者はそれを切り離し、といって返事を出すわけではなく、それを私信のときに使うのである。だから彼が出すハガキは、新しく購入したものではなく、「東京都千代田区内幸町二の二 日本放送協会 管理局文書部行」などと印刷してあるのがペンで消され、そのわきに目ざす宛名が書いてある。パーティの返事のハガキも、決して出さず、みんなわが物にしてしまう。そのたびに彼はこう思うのだ。

「これで、五円もうけた」(当時、ハガキはまだ五円であった。)

アンケートが速達で、三十円の切手が貼られているときなどは、たいへんな御機嫌で、水に浮かして切手をはがし、みんな机の引出しにしまいこむ。

「これで、三十五円もうけた」

アンケートの返事を出せば、わるくいってタオル一本くらい返礼があるものだが、なにしろ大学者であるから、そこまでは考えが及ばないのであった。

この大学者が、あるときひとつ小説をよんでやろうと考えた。彼は若いころ——十六歳のころまでは小説めいたものをよんだことがあるが、以来一切そのような無益な作り話に手をふれたことがない。それがどういふ心境の変化か、ふと近頃の小説というものを一冊だけよんでみようと思いたった。どうせよむのなら最上級のものをと考え、あたかもバステルナークの「ドクトル・ジバゴ」といふ本がノーベル賞をもらうとかいふことを家人に聞いたもので、

「それだ、ドクトル・ジバゴ。なんとなく響きがいい」と呟いた。

それから近所の小さな書店へわざわざ自身で買いに出かけた。本屋についてみると、いくらか背むしの、齒の黄いろい、うすぼけた老爺がただ一人店番をしていて、大学者の顔を見ると、いきなり、

「ドクトル・ジバゴですね」といった。

「そうだ、ドクトル・ジバゴだ。しかし、わしの買いにくる本がどうしてわかったね？」

「どうしてって、みんなが買いにきまさあ。ドクトル・ジバゴは特売で、四割引きですからね」

「そうか、四割引きか」

大学者はニコニコし、老爺が棚から出してくれた本を見ると、なんだか薄っぺらで安っぽい本である。

「これがドクトル・ジバゴか」

「ドクトル・ジバゴでまさあ」

「なるほど、そう印刷してある。するとわしが名を覚え違えたか」  
定価もたいそう安かった。それを四割引きで買った大学者は大満悦で自宅へ引返し、さてソファに背をもたせてその本をひらいたのであるが、やがてその顔が妙に青くなり、ついで赤くなり、グラグラと涎までたらしはじめた。

有体にいうと、その内容は徹底した春本であったのだ。しかも、地球上に現存するどんなそれよりも、あからさまで、どぎつく、煽情的で、もの凄いものであった。その一部をでもここに引用できるといいのだが、今はその本は日本警視庁の某室の大金庫の中に「秘」という印をベタベタ押されて門外不出である。

ともあれ、その内容が、ろくすっぽ小説をよんだことさえない大学者の心身に与えた影響は非常なものがある。彼は涎をたらし、そこらじゅうを這いまわり、うめき声をあげ、だしぬけに逆立ちしたりした。そのうち老妻におかしなふるまいをしようとして、したたか頬を叩かれ、雌の飼猫を追いかけてつんのめり、挙句の果てに、壁に掛けられたカレンダーの写真——そこには名勝の点景としてぼつんと小さく女性が写されていた——を抱いて、ふしぎなふるまいをなしたと伝えられるが、真偽のほどは定かではない。

翌朝には、大学者の精神神経系統の動乱は元に復した。のみならず、極めて立腹しはじめた。たちまち机に向うと、「ドクトル・ジバコを断罪す！」という激越な文章をかき、これを某新聞に投稿した。かかる破廉恥な、天をも地をも顧みざる、毒々しき醜悪なる小説が洛陽の紙価を高からしめ、ノーベル賞を受けるとはどういう罰当りの所業ぞや、という火をはくような一文である。彼は生れてはじめてその手紙を速達にし、机の引出しに大量に秘蔵してある三十円切手を三

枚も貼ったと伝えられている。

この文章が発表されるや——大学者の文だから即座に載ったのだが——彼の立場は妙なものになつてしまった。反論の投書が山積みされた。中には「題名さえもよみちがえている」というのもあった。困惑した大学者と新聞社の記者が、かの本を調べたところ、これが真赤なニセモノであることが判明した。さっそく警官同道でくだんの本屋に駆けつけてみると、老爺はいず、小首をかしげたおかみさんが、「そういえば、一度、そのような年寄りから道楽に店番をしたいからといって、お金をもらったことがある」とこたえた。

この事件は、実に曖昧モコとしているのであるが、世間の評判によると、おおむね次のように決まった。これこそかの怪盗——そのころまでわが国では彼は怪盗ドドンバと呼ばれていた——のしわざである。怪盗は、わざわざ「ドクトル・ジバコ」なる本を印刷し、自身であるか手下であるかはわからぬが本屋に手をまわし、高名なる大学者をからかったのである。

ここで首をかしげねばならぬのは、一体大学者がドクトル・ジバコなる本をよもうと思つたのをどうして探知したか、たとえ探知できてもその時間にインチキ本を印刷できたか、などの疑問である。しかし、世にマカ不思議なことがあれば、それはかの怪盗のしわざであると断定する風潮が、とうに世間には広まっていたのである。

なにしろ怪盗には不可能の文字がなかった。どんな大金庫でも赤子の手をねじるようにこじあけられた。こじあける？ いや、怪盗が「ひらけジバコ！」と呪文を唱えると、どんな超合金の扉も暗号鍵の効もなくひらりとあく、と信ぜねばならぬ痕跡があった。

そのころから、怪盗は「怪盗ジバコ」と呼ばれだし、この名称は海をこえてかなりの普及力を

有していたから、この文中でもその名を使用して頂く。

怪盜ジバコは、過去に於て、一国の国家予算をこえる盗みを働いた。大きな犯罪を列記してゆけば、その中の六割は彼に関係するとさえ言われた。しかも、あらゆる国に於てである。世人に好奇の目をむきださせた英国の列車強盗にしろ、ニューヨーク博覧会の「暁の夜光虫」とよばれるダイヤモンドの盗難にしろ、いずれはジバコが裏であやつっているにちがいないと、大衆は信じた。

ギリシャの新聞にその名が報じられると思うと、次の日には台湾に出現した。途方もない南海の孤島でヤシの実を十箇盗ったと思うと、共産圏から金の延棒を運びだした。彼の手下は、あらゆる人種を含めて、千人ともいわれ、一万名ともいわれる。

怪盜ジバコの特徴は、正体が絶対にわからないことである。彼は何国人にも化けられる。四十八を越える国語を自由にあやつるばかりでなく、大きな国のそれは方言まで意のままである。日本に於ては、東北弁、大阪弁、熊本弁を——もとより標準語はアナウンサーより明快である——巧みに使用したという報告がある。沖縄では宮古島の方言をしゃべり、本島人の年寄りとは会話が楽でなかった、とも伝えられている。過去、彼は八十六回逮捕されたと報告されたが、そのいずれもが別人であった。

ちかごろでは、警察も半ばあきらめて、ジバコと思われる男を逮捕しても、

「おまえは怪盜ジバコか？」

「残念でした。エヘヘ」

といわれると、「又か」というように肩をすくめて、そのまま釈放する始末である。

年齢もまったくわからない。三十になるかならぬかの若造だと主張する警部もいれば、いや、あれは影武者で、本人は足腰立たぬ老人だと言いはる記者もいる。その変相術は瞳孔のいろから骨格までを変えてしまし、フランケンシュタインのような異形の者から、絶えいるような美女にまで姿を変えるらしい。

また彼は飛行機の操縦から、ダイコンおろしのすり方、あらゆるスポーツに秀でてゐる。格闘をやらせたらジェームズ・ボンドでも危いだろうとのもっぱらの評判だ。要するに、彼は超人なのである。

その超人ぶりにものをいわせ、ジバコは過去に於て、史上最大、最悪の盗みを働いた。彼によってつぶされた銀行は百三十八、彼によって総辞職した内閣は三つ、彼によって更迭せしめられた警視總監はその数を知らぬ。

しかし、怪盗ジバコが途方もない金持になるにつれ、その盗みにはあこぎなところがなくなくなった。極めて余裕のある、むしろユーモアのあるものに化してきた。世間では、彼が金の捨場に困り、冗談で盗みを働いているのだ、と真顔で主張する人もいる。ときどき彼は、一万ドルを盗むのに、あきらかに十萬ドルをかける、というやり口がほの見えるのだ。

この間も英国の片田舎の質屋へ盗みに入るのに、わざわざ地下道を掘り、とどのつまりは飼猫の食物を入れる小皿を一枚盗っていった。その皿が実はいさうの骨董品なのではないかという警察の質問に対し、おやじはおろおろと言った。

「あれは絶対六ペンス以上の価値はありませんので。スーパー・マーケットで買ったばかりの品物で、へい」

なぜ怪盜ジバコのしわざであるかわかるかという点、彼は盗みの現場に一枚のカードを残してゆくからである。

そのカードには、

「無礼ながら盗みに入り申し候」

と、十何カ国語で記してあり、その下に世界各国で使われている彼の通称がおよそ五十ばかり印刷してあった。

このカードは金ぶちの、古代の王家の紋のごときすかしのはいっている上質の紙で、なかなか偽造もできなかった。従ってコレクターの間ではたいへんな高値を呼んでいて、怪盜ジバコに盗みに入られても、ちょっとした金額だとむしろ得になるというのが実状であった。

言うまでもなく、怪盜ジバコは各国の大衆の間で、隠然たる人気を有していた。オランダの女学校での人気投票で、女王が辛うじてジバコを二票凌駕した、というのが実状である。

従って、世界各国人は、怪盜ジバコが自分の国の人間であると主張してゆずらなかつた。アメリカ人にいわせると、ああいう世界一のことをやるのはもちろんアメリカ人さ、ということであり、フランス人は、もちろんあんなエスプリのある仕事はフランス人に特有のものである、と言った。

わが国に於ても、怪盜ジバコは実は日本人であるという説が、ヨシツネとジンギスカンを結びつけるよりもずっと強力で信ぜられた。現に「怪盜ジバコの秘密」という新書判の本はベスト・セラーとなったが、その中ではジバコは私生児として大正八年に北海道の利尻島で生れていることになっている。



とある東京の下町の夕ぐれどき。

そこは地面の湿った露地で、人通りはほとんどなかった。ときどき、洗面器をかかえて風呂へ急ぐ男女の姿が見られるばかりである。

電車通りの方角から、一人の六歳ぐらいの男の子が、うつむきがちにとぼとぼとやってきた。ほころびかけたセーターに半ズボン、ちびた下駄を突っかけている。

近づいてきたのを見ると、その丸顔の顔が、なにかを懸命に堪えるようにゆがんでいる。そのまま十歩ばかり、つまずきながら歩く。と、その小さな体は、急に電柱にむかって走りだし、そのかげでしくしく泣きはじめた。これは人間というものがいかに弱い存在であるかを証している。男の子が泣いたということより、電柱を求めたということが、である。大体、人間というものには、オシッコをするときも電柱を求める。自分はそうでないと感じる人でも、なんにもない原っぱの真中でオシッコをするとき、得もいえぬ頼りなさや空白感を覚えるだろう。

スエズ運河のサウジアラビア側は、文字どおり一木一草とてない、荒涼とした砂漠である。ただ、ある箇所には、自動車道路——本当は道路ではなく、その辺りを自動車が進むというだけである——に沿って、ひとむらの灌木がある。この灌木のそばを通りかかると、どの自動車も必ずとまり、男どもがおりてゆき、灌木にむかってオシッコをする。オシッコのせいで灌木はとうに枯れてしまっている。だが、のべつぎらぎらと太陽のかがやく砂漠にあっては、オアシスと